

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第5回

第一部

オランダとベルギーの子どもの本は、いま (要旨)

平成 23 年 7 月 23 日

講師：野坂悦子

はじめに

今日は「オランダとベルギーの子どもの本は、いま」ということでお話しさせていただきます。

オランダという国の人口は 1,660 万人です。ベルギーは約 1,000 万人で、ベルギーの人口のうち約 600 万人がオランダ語圏、そして約 400 万人がフランス語圏にいます。(ごく一部ドイツ語圏もあります。) したがって、ベルギーの絵本について話す場合は、オランダ語圏とフランス語圏、両方の絵本の流れをお話ししなければいけません。

オランダとベルギーは、神聖ローマ帝国の支配下にあった時代は「ネーデルラント」と呼ばれる一つの地域でした。しかしオランダは早くも 17 世紀に独立します。一方、様々な変遷を経て、ベルギーが独立国となったのは 1839 年であり、ベルギーのほうが国の成り立ちが新しいのです。様々な事情から、ベルギーは第二次世界大戦後の児童書の発展において、オランダに遅れをとりました。しかし、今まさに開花期を迎えています。私はオランダ語が専門なので、まずオランダ語圏の児童文学を中心に話ししたあと、ベルギーのフランス語圏の児童文学に少し触れ、キティ・クロザーさんの講演への導入とさせていただきます。

1. オランダの児童文学

- 『イップとヤネケ』(アニー・M.G.シュミット作、岩波書店、2004 年)
- 『ネコのみヌース』(アニー・M.G.シュミット作、徳間書店、2000 年)

アニー・M.G.シュミット(原語読みだと、エム・ヘー・シュミット)は、国際アンデルセン賞作家賞を 1988 年に受賞したオランダを代表する書き手です。前者は、戦後すぐの 1950 年代に新聞の連載から始まり、オランダ人だったら知らない人はいないほど良く知られたシリーズです。1970 年に出版された後者も大変人気があります。シュミットの作品はベルギーでもよく読まれ、今では日本語でも読むことができるようになりました。

- 『王への手紙』上下巻(トンケ・ドラフト著、岩波書店、2005 年)

日本で出版されたのは数年前ですが、オランダでは長く愛読されている騎士物語です。

この本は、オランダ「金の石筆賞*」50周年を記念した「金の石筆の中の金の石筆」賞に選ばれました。ドラフトの作品は、この本を皮切りに、次々と岩波書店で翻訳が続いています。
(*創立時の名称は「年間児童書賞」)

- 『不幸な少年だったトーマスの書いた本』(フース・コイヤー著、あすなろ書房、2008年)

- 『ひみつの小屋のマデリーフ』(フース・コイヤー文、国土社、1999年)

コイヤーは学校の教師から出発し、作家になりました。小学校を舞台にした作品、動物を主人公とする作品物、寓話など作品は幅広く、どれもエンターテインメント性と文学性を兼ね備えています。大人の本も書き、いろいろなジャンルに挑戦する作家です。

- 『夜物語』(パウル・ビーヘル作、徳間書店、1998年)

ビーヘルは素晴らしいファンタジーの作家です。毎年少なくとも一作はホラント出版のために書き続け、生涯に80点以上の作品を残しました。日本でもこの他にも何作か出ていて、いま私がまた新しい作品『ネジマキ草と銅の城』を訳しているところです。

- 『第八森の子どもたち』(エルス・ペルフロム作、福音館書店、2000年)

ペルフロムは金の石筆賞を3回受けた、オランダを代表する児童文学者です。この作品は、第二次世界大戦のとき、アルネム郊外の農家に疎開したノーチェの物語で、少女の目から見た戦争を子どもらしい自由な感覚で描いています。

- *Heb je mijn zusje gezien?* (私の妹を見た?) / Joke van Leeuwen. Querido, 2006

- 『みんながそろろう日：モロッコの風のなかで』(ヨーケ・ファン・レーウエン, マリカ・ブライン作、鈴木出版、2009年)

20代のとき、彗星のように児童文学界に登場したファン・レーウエンは、絵も文も自分で書くダブルタレントの持ち主です。ウィットに富んだその作品は、常に暖かなヒューマニズムに貫かれています。オランダで生まれ、ベルギーで育ち、現在はベルギーのアントワープに住むファン・レーウエンは両国の橋渡し役ともいえる作家です。

- 『りんごちゃん』(ディック・ブルーナさく、講談社、1981年)

- 『ちいさなうさこちゃん』(ディック・ブルーナ文・絵、福音館書店、昭和39年)

- 『うさこちゃんとふがこちゃん』(ディック・ブルーナ ぶん/え、福音館書店、2011年)

ディック・ブルーナは、1955年に最初の絵本『りんごちゃん』を私家版で出しました。その後、1963年に『Nijntje』を出版社より出し、日本では1964年に『ちいさなうさこちゃん』と訳されて、世界でもいち早く紹介されました。オランダの絵本作家の中で、もっとも良く知られた存在がブルーナですし、世界の中でも、もっとも良く知られた絵本作家かもしれません。

- 『たいせつなてがみ』(マックス・ベルジュイス絵と文、セーラー出版、2011年)

- 『かえるくんどうしたの』(マックス・ベルジュイス文と絵、セーラー出版、1990年)

もう一人、オランダで忘れてはいけない絵本作家はマックス・ベルジュイスです。代表作は、1989年からスタートして全12冊出した「かえるくん」のシリーズです。国内外での評価の高まりを受け、2004年、ベルジュイスは国際アンデルセン賞画家

賞を受賞しました。オランダの世界的な作家というと、先ほどのアニー・M.G.シュミットとマックス・ベルジュイスの二人が、よく並び称されます。

- 『小さな可能性』(マルヨライン・ホフ作、小学館、2010年)

最近の動きとして、新人作家を二人ご紹介します。一人はマルヨライン・ホフで、この本は去年、小学館から出ました。戦場に行ったまま消息不明になった医者のお父さんを、不安な気持ちで待つ女の子を主人公にしています。不安と向き合う少女の心理を掘り下げて描いた、新しいタイプの作品です。2007年に金の石筆賞を取りました。

- 『コブタのしたこと』(ミレイユ・ヘウス作、あすなろ書房、2010年)

こちらは2006年に金の石筆賞を取った作品です。「悪」を内在したコブタという少女と、障害を持つ主人公のリジーがどう付き合っていくか。リジーがコブタの力から逃れ、自分を見つけていくまでの過程を描きます。最近のオランダ語圏の児童文学界では、このようにテーマ性・問題性の強い内容を、文学的な言葉で、しかも比較的短い分量でまとめた作品が目立つようになりました。

2. ベルギーの児童文学

- 『フランドレンの獅子 De leeuw van Vlaanderen』(ヘンドリック・コンシャンス作 1838年)

ベルギー児童文学は、この本によって始まったといわれます。ベルギーの独立が1839年、そのまさに前年に出版された作品です。当時ベルギーの支配階級はフランス語を話していましたが、庶民によるオランダ語運動が盛り上がり、「フランドレンの獅子」はそんなさなかに書かれました。当初は大人の作品だったのですが、子どもたちに今も読み継がれている、記念碑的な作品です。

その後20世紀に入ると、ベルギー・オランダ語圏にも専門の児童書出版社が設立され、素敵な絵本が次々と生まれてきました。

- 「タンタン」シリーズ(1930年～)

- 「ススカとウィスカ Suske en Wiske」シリーズ(1945年～)

ベルギーを特色づける児童文化、それは漫画です。1930年にスタートした、エルジェによる「タンタン」シリーズは、フランス語圏を代表する漫画だとすれば、オランダ語圏では「ススカとウィスカ」というシリーズが1945年に始まりました。「タンタン」はエルジェが亡くなった段階で、シリーズとして完結しましたが、「ススカとウィスカ」は作者のウィリー・ヴァンデルステーンが亡くなった後も、プロダクションにより製作が継続し、今でも新作を買うことができます。ベルギーとオランダの両国で、人気の高いシリーズです。

- 『調子っばずれのデュエット』(バルト・ムイヤールト作、くもん出版、1998年)

ローマン・カトリックの影響を強く受けていたベルギーでは、離婚や死といったテ

マについて書きづらい時期がありました。1970 年になると大分自由になってきます。社会派の作品があらわれ、80 年代には質の高い作家の数も増え、いよいよ児童文学が盛んになってきます。その動きを象徴的するのが、バルト・ムイヤールトです。1983 年、17 才のときに『調子っぱずれのデュエット』でデビューし、その後、小説の作法をイギリスの作家エイダン・チェンバーズに学んで、今では大物作家に成長しています。彼の本はベルギーの出版社からではなく、より大きな販路を持つオランダのケリド出版から数多く出ています。

- 「きつねのフォスとうさぎのハース」シリーズ（シルヴィア・ヴァンデンヘーデ作、岩波書店、2007 年～）
- 『シェフィーがいちばん』（カート・フランケン文、BL 出版、2007）
- 『シェフィーはがんばる』（カート・フランケン文、BL 出版、2010）

1990 年代以後、特に 2000 年を過ぎると、ベルギー・オランダ語圏で出版されたベルギー作家の本も、オランダで普通に読めるようになりました。そんな中、シルヴィア・ヴァンデンヘーデ、カート・フランケンといった作家があらわれ、オランダの画家と組んで仕事をしています。その作品は、ベルギーとオランダの両方で大勢の読者を獲得し、翻訳出版されて、世界に広がっています。

現代ベルギーの絵本作家たち

イングリッド・ゴドン

- 「ネリーとセザールのちいさなおはなし」シリーズ
カルル・クヌート

- *Eén miljoen vlinders* (100 万匹のチョウチョ) / Edward van de Vendel, met illustraties van Carll Cneut. Eenhoorn, c2007
- *Dulle Griet* (狂女フリート) / Geert De Kockere ; met prenten van Carll Cneut. Eenhoorn, c2005

「狂女フリート」はピーテル・ブリューゲルの絵を基にした絵本です。ネーデルラントは伝統的に絵画で知られた地域であり、ブリューゲルはもとより、新しいところではムリンクとかアンソールも有名です。ベルギーのオランダ語圏の絵本作家の特徴は、ブリューゲルなどの古い技法を徹底的に学んだところから、新しいものを作っていく点にあります。クヌートには、日本語になっている作品も何点かあります。

クラス・ヴェルプランケ（フェルプランケ）

- 『アップルムース』（クラス・フェルプランケ作・絵、朝日学生新聞社、2011 年）
2001 年にボローニャ児童図書展のボローニャ・ラガッツィ賞を受賞したヴェルプランケ（フェルプランケ）は、若手のホープと言えます。ブラチスラヴァ世界絵本原画展で受賞した、先ほどのカルル・クルートと並んで、ベルギーのオランダ語圏の絵本界を国際的にリードする存在です。

ヒド・ファン・ヘネヒテン

- 『わらって!リッキ』（ヒド・ファン・ヘネヒテンさく・え、フレーベル館、2001 年）

ファン・ヘネヒテンは、ベルギーやオランダのみならず、世界中の子どもたちに愛されている絵本作家です。日本でも数多く紹介されています。最近はカミシバイも手掛けるようになりました。

ガブリエル・バンサン

- 『くまのアーネストおじさんあめのひのピクニック』（ガブリエル・バンサンさく、ブック・ローン出版、1983年）
- 『アンジュール：ある犬の物語』（ガブリエル・バンサン作、ブックローン出版、1986年）
- 『たまご』（ガブリエル・バンサン作、ブックローン出版、1986年）

1981年、54歳のとき、『くまのアーネストおじさん かえってきたおにんぎょう』でデビューしたバンサンは、50点以上の絵本を残しました。優しいタッチの確かなデッサンで知られますが、ベルギー・フランス語圏の絵本界で、アウトサイダーを物語に登場させ、消費社会に対して批判的な目を向けた最初の作家だとも言われています。『アンジュール：ある犬の物語』では捨てられた犬が主人公ですし、「アーネストおじさん」も決してお金持ちではなく、いつも食べることに苦労しています。『たまご』という原子力発電所の問題を象徴するような、重いテーマのある作品も書いています。

キティ・クローザー

ベルギー北部のオランダ語圏、フランドル地方では斬新な現代性が高く評価される傾向があります。一方、南部のフランス語圏は文化混交の地であり、色々な風が吹く中で、海外から来たパートナーと協力し合い、自由に作品を作ってきた地ではないかと思います。

キティ・クローザーさんは、「線の魔術師であり、雰囲気を作ることに非常に長けている。絵本の伝統を守りつつ、それを変化させて革新させている。彼女の世界は想像力と現実の間の扉が大きく開いていて、一人一人の読者に向かって優しく語り掛けているけれども、非常に奥深く響く。困難な状況にある人たちに心からの共感を寄せ、弱さが強さに変わるところを見せてくれる。ヒューマニズムとシンパシーが現実化してアートと一体化している」という評価を受け、2010年のアストリッド・リンドグレーン記念文学賞を受賞したと聞いています。何より、子どもたちの信頼を絶対に裏切らない。その子どもたちへの愛というか、弱い者に対するエールが、キティ・クローザーさんを支えてきたのでしょう。バンサンとも共通するこの傾向は、もしかしたら、ベルギー・フランス語圏の絵本の伝統と言えるものなのかもしれません。

ちょうど時間になりました。これからキティさんに絵本作家として伝えたいこととお伺いしたいと思います。どうもありがとうございました。